

香取文書から香取神宮神幸祭(御船遊)の意味づけの変化を考える —あわせて八龍神について—

木村 修

1 神幸祭の起源

- ・鹿島神宮…『常陸国風土記』香島郡の記載(岩波書店『日本古典文学大系 2 風土記』69頁)

「年別の七月に、舟を造りて津の宮に納め奉る。古老のいへらく、倭武の天皇のみ世、天の大神、中臣の巨狭山命(おほさやまのみこと)に宣りたまひしく、「今、御舟を仕へまつれ」と、のりたまひき。(中略)爰に、則ち懼り惶み、新に舟三隻、各長さ二丈余なるを造らしめて、初めて献りき」

- ・香取は『日本書紀』に「楫(櫂)取」と表記されている…水上交通・船の運航に係る神
- ・神幸祭(御船遊)はその神格を象徴する祭祀
- ∴鹿島神宮の御船祭と同じく、奈良時代8世紀にまで遡る可能性が考えられる

2 神幸祭(中世には御船遊・三月神事・三月御幸などと称された)の中世的変容

- ・神幸祭絵巻に描かれた行列構成

巻頭は、津宮・三鳥居・瞻男社・忍男社に行列が到着する場面

先頭には、一御船木・八龍神の持楯・二御船木・大楯・三御船木・神馬

神宮寺(金剛宝寺)の門前に観閲する国司代と宮之介(地頭・武士)

神輿に続き大神主が先導し、権禰宜・国行事・大禰宜・神主(大宮司)が随兵を従えて供奉

巻末は、留守役が守る神宮境内の建物(楼門・中門・正神殿)

∴御船遊は新たな3隻の船(御船・御船木)を津宮に奉納する祭祀(鈴木哲雄氏)

*この行列構成は、京都の『年中行事絵巻』(12世紀後半頃成立)に描かれた、祇園御霊会や稲荷祭の祭礼行列で、神輿が都の中を巡行して御旅所に渡御する「御旅所祭祀」の行列の「神輿渡御行列」と共通しており、都の祭礼行列「都ぶり」の影響がみられる(笹生衛氏)

- ・『水戸彰考館本香取明神祭礼図(神幸祭絵巻)』(焼失。香取神宮所蔵写真アルバムによる)の記載

[権檢非違使家本神幸祭絵巻及び香取社神事次第目録写断簡(「香取古文書写」二、『千葉県歴史 資料編 中世2』

香取大禰宜家文書41号)にも同文の記載がある]

[表紙見返し]当日の供奉の次第は嚴重にこの絵巻のとおりに執り行い、のちのち異論に及んではならない

[奥書の記載]建仁2年(1202)の帳を至徳3年(1386)に改め誌し、さらにそれも虫損したため永正13年(1516)に書写。神事は永徳年間(1381～84)まで途切れなく斎行された

3 神幸祭の中断

- ・ 応安 5 年(1372)の大禰宜大中臣長房訴状(『千葉縣史料 中世篇 香取文書』旧大禰宜家文書 89 号)

「一年中九十余ケ度祭礼悉令退転」「其外切碎八龍神木像上者、神人殺害刃傷不可勝計」
∴その状況下でも神幸祭は永徳年間まで退転なく斎行された…神幸祭重要視のあらわれ
* 八龍神の神威

天正 20 年(1592)の行事禰宜等六人衆起請文(『千葉縣史料 中世篇 香取文書』旧大禰宜家文書 276 号)

「当社大明神王子卅よ(余)ヶ所左右之八龍神の御はつ(罰)をかふむ(被)るへく候」

- ・ 享禄 2 年(1529)の香取社宮定(「香取古文書」十、『千葉県の歴史 資料編 中世 2』香取大禰宜家文書 44 号)

「 宮定

正一位勲一等香取大明神并王子三十余ヶ所左右八龍神等、於中殿三月御祭御陣職帳次等

一 楯札二人 白杖一人 田冷

一 次立標一人 左右綱取二人

次立将軍代 物申祝中臣

次立将補代 副祝中臣

次立大補代 大祝梶取

次立永箱所馬乗代 権禰宜中臣

次立大將軍代 大宮司散位大中臣国房

次立手振十二人

次立検杖八人 御鉾役

次立御弓箠役 内院八人大神主

次立御神輿持十二人

次立梓取五人 御厩別当酒司

次立四疋御馬口付四人 神夫

次立歌人十二人并八乙女八人

次立三御船人夫二人 行事押領使

次立二御船人夫二人 行事権檢非使

次立一御船人夫二人 行事正檢非違使

次立副將軍代 大禰宜散位大中臣実之

右、件御船遊陣職帳次第、任恒例被定置注進如件、

享禄二年〈己丑〉三月九日(以下、署判 9 人分略す)」

* 御船木は後方に移動。供奉の神職に武官に擬した表記が付けられた

* 永享 11 年(1439)の香取社御船遊陣職帳次第写(『千葉県の歴史 資料編 中世 2』香取物忌家文書 7 号)は前欠文書だが、後半部分の比較から享禄 2 年と構成がほぼ同じであったと推測される

- ・永禄 11 年(1568)の三月神事目録案(『千葉縣史料 中世篇 香取文書』旧案主家文書 244 号)

「永禄十一年〈戊辰〉三月御神事早案 (中略) 香取大神宮毎年三月初午御幸御祭、
異国追伐御発向之次第目録、任往昔例式所誌置之事」*(註)〈 〉は割書、以下同じ

*この永禄 11 年(1568)以後、御船遊は斎行されなくなったか？

〔この見方が江戸時代の久保木清淵『香取私記』(『香取群書集成』第 1 巻 141 頁)、小林重規『香取志』(同 231 頁)に踏襲されていく〕

- ・ 17 世紀末頃の香取社祭礼帳写(色川本「香取田所文書拾遺」一、『千葉県の歴史 資料編 中世 2』香取田所家文書 84 号)
「三月幸御神事 一、上ノ巳午ノ日 今ハ神事無之」

4 神功皇后伝説との結合

- ・天保 4 年(1833)の『香取志』(小林重規著(『香取群書集成』第 2 巻)231 頁)

「三月一日神事 今則亡 神幸ノ神事 三月初ノ巳午ノ日也、神功皇后三韓御征伐の有様を摸る也、香取浦に神輿を出シ奉リ御船に乗セ奉ル也」

*神功皇后三韓征伐は、『日本書紀』に載る、仲哀天皇の後神功皇后が神託に従い自ら新羅に出兵して、その王を服属させ、さらに百済・高句麗をも帰順させたとする話で、新羅が「財土(財宝国)」のために出兵したとされる(岩波書店『日本古典文学大系 67 日本書紀 上』334 頁)

↓

元寇後に成立した『八幡愚童訓』では、日本が先に襲われたため出兵した話に変化した

(岩波書店『日本思想大系 20 寺社縁起』170 頁～175 頁)

∴元寇以後の異国再来襲の脅威と危機感の高まりにより神功皇后三韓征伐伝説が再生した

- ・香取神宮における異国襲来の危機意識

弘安の役(1281)翌年の懸仏(香取市牧野 観福寺所蔵)

香取神の本地仏である十一面観音と釈迦如来をそれぞれ本尊とする懸仏 2 面

〔鏡板の陰刻銘〕弘安 5 年(1282) 8 月 1 日に大禰宜の大臣実政が「天長地久、当社繁昌、異国降伏、心願成就」を祈願し造立すると記されている

正和 5 年(1316)の大禰宜大臣実長訴状写(『千葉縣史料 中世篇 香取文書』香取神宮文書 14 号)

元寇の際の降伏祈祷の功績と異国征討の軍神との神威を称えて、遅滞している造営・遷宮事業の進展を鎌倉幕府に願い出たもの

*文中には「御神体御輿并諸王子以下八龍神御神宝物」と書かれている

文書末尾に「弘治三年〈丁巳〉卯月十七日書写畢」の記載 *弘治 3 年は 1557 年

応永 26 年(1419)の朝鮮軍の対馬島襲撃(応永の外寇)→元寇の記憶、恐怖のよみがえり

∴異国から来襲された恐怖の記憶、再来襲を危惧する意識は根深く残り、中世後期の日本では異常な精神状態のなかで「神功皇后三韓征伐伝説が妖怪のごとく再生された」(村井章介氏)
→神幸祭のいわれの理解に投影し、神功皇后伝説と合体していったと考えられる

＊大禰宜大中臣長房申状(貞治 5 年(1366)か)に「神功皇后責新羅百濟給之時」の文言がある

(「香取古文書」七、『千葉県の歴史 資料編 中世 2』香取大禰宜家文書 18 号)

『八幡愚童訓』が神功皇后の前後に随う住吉大明神を大將軍、甲良大明神を副將軍としたのに倣い、香取社宮定は大宮司を「大將軍代」に、大禰宜を「副將軍代」に擬えたか

5 神幸祭の再興

- ・明治 8 年(1875)に午年式年神幸祭(軍神祭)として再興

期日は新暦に改めて 4 月 14 日とされた

「中世、徳川氏天下に覇たるの時は中絶して其式行はれさり、只絵画文書に存し、古老口碑に伝ふるのみなりしなり、然るを維新已後有志者奮起し、再興を官に乞ひ、明治八年四月更に旧章を斟酌し新式を定め、以て祭典を執行す、其後明治九年・同十年・同十二年・同十五年御船遊大祭を執行し、以後毎午年(即十三ヶ年毎ニ一ヶ度)大祭を執行することゝし、平年は神輿を幣殿に渡御し、御船代一隻を津宮鳥居川岸より利根川に(旧の香取の浦)納ることゝす」〔伊藤泰歳著『祭典旧儀下調書』(明治 17 年頃、『香取群書集成』第 2 卷)128 頁〕

「御船代は旧図式によつて新調す」〔伊藤泰歳同上書(『香取群書集成』第 2 卷)139 頁〕

- ・行列の先頭には一御船・二御船・三御船が位置するが、八龍神はなくなる

＊大正 7 年(1918)の神幸祭記録写真には八龍神の持楯と標旗が写る(一時復活したか)

〔参考文献〕

- ・笹生衛「『香取神宮神幸祭絵巻』とその諸本」(『國學院大學神道資料館館報』15 号、2016 年)
- ・笹生衛「神輿と祭礼の誕生」(同氏著『まつりと神々の古代』吉川弘文館、2023 年)
- ・鈴木哲雄「権檢非違使家本『香取神宮神幸祭絵巻』と造営注文」(同氏著『香取文書と中世の東国』同成社、2009 年。初出 2007 年)
- ・鈴木哲雄「中世香取社の『御船遊』と東国の物流を支えた海民」(『本郷』181 号、吉川弘文館、2026 年)
- ・塚本明「神功皇后伝説と近世日本の朝鮮観」(『史林』79 卷 6 号、1996 年)
- ・水谷類「鹿島社大使役と常陸大掾氏」(同氏著『中世の神社と祭り』岩田書院、2010 年)
- ・村井章介『アジアのなかの中世日本』校倉書店、1988 年)
- ・湯浅治久「在庁官人次郎介桑原氏から六所神社神主桑原氏へー下総国衙在庁の系譜をひく『村の領主』一」(『平成 17 年度市立市川歴史博物館館報』2007 年)
- ・木村修「香取神宮の八龍神ー造営・遷宮史料と起請文からー」(『地域史の再検討 村田一男先生喜寿記念論集』同論集編集委員会、2017 年)
- ・木村修「鹿島・香取神宮、春日大社と八龍神の関係」(『成田史談』64 号、2019 年)
- ・木村修「香取神宮の八龍神ーその新資料と言説の変化ー」(科研費研究成果報告書『香取文書の文化財としての保存に向けた基礎的研究』研究代表者鈴木哲雄、2024 年)
- ・木村修「香取神宮神幸祭(御船遊)の言説について」(科研費研究成果報告書『香取文書関係資料の文化財としての保存に向けた発展的研究』研究代表者鈴木哲雄、2026 年)